

# 高機能広汎性発達障害女子への社会性発達支援プログラム作成の試み

辻井正次 (中京大学現代社会学部)  
神谷美里 (子どものこころの発達研究センター)  
石川道子 (名古屋市立大学病院小児科)

## <要 旨>

高機能広汎性発達障害の女子達がより適応的な生活を送ることを支援するため、女子としての社会スキル・知識の獲得を目指したプログラムの作成を試みた。とりあげたスキル・知識のカテゴリーは「ふるまいやマナー」、「身だしなみ」、「コミュニケーションスキル」「思春期の体の発達」であった。これらの獲得を目指し、計8回で構成されるプログラムを作成し、実施した。

プログラムは、特定非営利活動法人アスペ・エルデの会の「女の子グループ」で実施した。「扱った社会的スキル・知識の妥当性」、「各プログラムセッションの内容、および変化」という観点から、プログラムに参加した保護者、およびスタッフに評価を依頼した。結果、本プログラムで扱ったスキル・知識のカテゴリーの妥当性は高いこと、女子として必要なスキル・知識の獲得のための契機的な機能、および女子同士で学べる場、仲間関係を形成する場としての機能を担っていると考えられた。今後の課題としては、とりあげるスキル・知識をさらに洗練させること、参加者の発達水準・理解に合わせたセッションにしていけること、スキル・知識の定着化を図ることがあげられると論じた。

## <キーワード>

高機能広汎性発達障害 女子 社会性 発達支援プログラム

### 【はじめに】

広汎性発達障害（以下、PDD）の女子の発生率が男子に比べて低いことは古くから指摘されている。こうした女子例の少なさのためか、性差を考慮に入れた特性理解や社会性の発達支援についての研究は数が少ない。本田他（2000）が、学齢期の女子例のみで構成した「学齢グループ」でのグループ指導や「ジュニア・エアロビクス教室」の開催をし、女子例への支援をすすめているが、ここでの支援は女子例のみで活動をすることが中心となっており、女子例に対する具体的な支援内容については明らかにされていない。しかし、男性ならさして気にならずに許容される程度のコミュニケーションや社会性の不器用さも、女性では拒絶される原因となる可能性があるという指摘（神尾,2005）にあるように、女子の場合は女子としての社会的スキルや必要な知識をその発達過程のなかで要求されるようになる。そして、それらが身につけていないことは仲間関係の形成を阻害する、あるいはいじめの対象となる要因となり得る。特に、高機能広汎性発達障害（以下、HFPDD）の場合には、定型発達児者とともに学校生活、社会生活を過ごす場合が多

い。定型発達児者とともにより適応的な生活を送るためには、女子としての社会的スキル・知識を持っていることを求められるが、HFPDD児者はそれを自然に獲得することは難しい。

そこで本研究では、女子としての社会的スキル・知識の獲得を支援するプログラムを作成、実行し、その有効性を検討することとする。

### 【方法】

#### 1. プログラムの作成

神谷他（2007）、および親のニーズをもとに、プログラムで取りあげる社会的スキル・知識を選出し、プログラムスケジュールを確定した。選出したスキル・知識は「ふるまいやマナー」、「身だしなみ」、「コミュニケーションスキル」「思春期の体の発達」である。このうち、「ふるまいやマナー」、「身だしなみ」、「コミュニケーションスキル」といったスキルは、日常生活を送る上で必要不可欠なものであることに加え、女子の場合は“女の子らしさ”を求められる側面である。また、「思春期の体の発達」は誰にでも訪れるものであり、その変化に対応できる知識と対処スキルを習得することも女子としては必須である。

表1 プログラムスケジュール

回	内容	スキル・知識カテゴリー	具体的なスキル・知識
第1回	外食場面での社会的ふるまいとマナー	ふるまいとマナー	・店内での適切なふるまい方 ・食べるときのマナー
第2回	スキンケア	身だしなみ	・スキンケアの知識 ・正しいスキンケアの仕方
第3回	身体的成熟についての知識とそれに合った下着の選び方	思春期の体の発達	・思春期の体の発達についての知識 ・下着について正しい知識(選び方、必要性)
第4回	買物場面での社会的ふるまいと女性らしいファッション	ふるまいとマナー 身だしなみ	・店内での適切なふるまい方 ・服の選び方 ・余暇の過ごし方
第5回	聴き方・話し方	コミュニケーションスキル	・聴き方のスキル ・話し方のスキル
第6回	余暇活動Ⅰ(お菓子作り)	余暇活動	・余暇の過ごし方 ・女子同士での集団活動
第7回	余暇活動Ⅱ(遊園地)	余暇活動	・余暇の過ごし方 ・女子同士での集団活動
第8回	月経について	思春期の体の発達	・月経の仕組みの知識 ・月経の対処の仕方

以上のように、今回とりあげたスキル・知識は、“女子として”適応的な生活を送る上で必要不可欠であると考えられ、今回のプログラムで扱うこととした。実際のプログラム内容については表1に示したとおりである。なお今回、スキル・知識の獲得の他に余暇活動をプログラムへ組み込んだ。これは、彼女らが余暇活動スキルの獲得にも困難さを持つことに加え、女子同士の仲間関係形成の場を提供することもプログラム実施上、必要と考えたためである(神谷他,2007)。

## 2. プログラムの実施

プログラムは、特定非営利活動法人アスペ・エルデの会において実施した。この会では、「女の子グループ」の活動を継続的におこなっている。今回は、ここに所属する小学校4年生以降の女子例を対象にプログラムを実施した。なお、会に所属する女子例はすべて、児童精神科医あるいは小児科医からDSM-IV-TRによる診断を受けている。

実際のプログラム参加に際しては、日程や当日のスケジュールを保護者に知らせ、参加者を募る形態をとった。そのため、小学校4年生以降の女子例は29名が登録しているが、実際にプログラムに参加したのは小学4年から短大2年生までの13名であり、各回の参加者も流動的であった。この13名の概要については、表2に示す。このうち、高機能(IQ>70)ではない者も含まれているが、多くは通常学級で過ごしており、高機能群と同様の問題を抱えている。そこで今回は、“高機能群に必要とされるスキル・知識の獲得”を前提としてプログラムを作成した。

プログラムは、1~2ヶ月に1回のペースでおこなった。当日のスケジュールや具体的な内容はセッションごとに構成した。各セッションの概要については、表3に示したとおりである。各回とも、プログラムを統括するスタッフ数名と、参加者に個別に対応するスタッフとでプログラムを進行した。さらに、第2回、3回、8回では、より正しい知識の獲得を目指し、その分野の専門家を講師として招いてセッションをおこなった。第2回は美容師と化粧品メーカーに、第3回は下着メーカーワコールが主催するツボミスクールへ依頼、第8回は保健師・看護師の有資格者を講師とした。

## 3. プログラムの評価

今回のプログラムの評価は次の2点から、おこなった。1.「扱った社会的スキル・知識の妥当性」、2.「各プログラムセッションの内容、およびセッション後の変化」である。この2点を評価することで、プログラムの妥当性と有効性について検討することとした。

1.「扱った社会的スキル・知識の妥当性」に関しては、今回のプログラムに参加していない者も含め、特定非営利活動法人アスペ・エルデの会の「女の子グループ」に所属するメンバーの保護者を対象とした。各プログラムセッションで扱ったスキル・知識について、それが女子達に必要なかどうか「とても必要である」から「全然必要でない」の5段階評定で評価を依頼した。なお、余暇活動を中心に扱ったセッションに関しても、そうしたスキルや機会がHFPDDの女子達に必要なものかという観点からの評価を依頼した。さらに、今回のスキル・知識以外でも身につけて欲しいものがある

表2 プログラム参加者一覧

学年	IQ	所属	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	参加回数
小4	98	通常学級		○	○	○	○		○		4
小4	75	通常学級				○	○		○		3
小5	57	特別支援学級		○		○	○		○	○	5
小5	63	通常学級	○	○	○	○	○			○	6
小5	77	通常学級	○		○	○	○	○	○	○	7
中1	87	特別支援学級				○				○	2
中3	96	通常学級	○	○	○	○	○	○			5
中3	65	養護学校中等部	○	○			○				3
中3	70	通常学級	○		○						2
高1	55	養護学校高等部				○					1
高2	91	専修学校		○							1
高3	72	私立高校	○	○		○					3
短2	85	私立短期大学						○			1
参加者数合計			6	7	5	9	7	3	4	4	

かどうか、「幾つかある」「多少ある」「ない」の3件法で回答を求め、あるとしたらどんなスキル・知識か自由記述で回答を求めた。

2. 「各プログラムセッションの内容、およびセッション後の変化」に関しては、プログラムに参加した保護者、および個別に子どもを担当したスタッフに評価を依頼した。まず、プログラムの内容の評価として、子どもの参加態度と当日のセッション内容の2点について、評定してもらった。子どもの参加態度に関しては、「①楽しく参加していたか」、「②積極的に参加していたか」、「③興味・関心を持って参加していたか」、「④内容を理解して参加していたか」の4点について、参加者ごとに担当スタッフに5段階評定で評価してもらった。次に、当日のセッション内容については、「⑤各セッションで扱った内容は女子に必要なものであったか」、「⑥スキル・知識獲得に際し、スケジュールや進行は適切であったか」の2点について、スタッフおよび保護者に5段階評定で評価を依頼した。この①から⑥について5段階評定で評価してもらうことに加え、具体的な様子や内容について自由記述で回答を求めた。

プログラム後の変化については、プログラムに参加した保護者に、プログラム終了後の子どもの様子について評価を依頼した。まず、表1に示した各プログラムで扱ったスキル・知識に関して何らかの変化があったか、「変化があった」「多少あった」「なかった」の3件法で回答を求めた。これについては、全プログラム終了後に評価を依頼した。さらに、スキル・知識の獲得を主な目的とした第2回、3回、5回、8回については、活動後1週間、あるいは1ヶ月後の様子について回答を求めた。評価の内容は、活動を受けて変化があったかどうか、あったと

したらどんな変化か記述してもらうものとなっている。なお、この評価に関しては評価用紙を活動時に渡し、記入後に郵送にて回収した。

表3 各セッションのスケジュール

第1回 外食場面での社会的ふるまいとマナー	
1.	外食場面でのふるまいと食べ方のマナーについての事前学習
2.	外食(ランチ)
3.	ふり返り
第2回 スキンケア	
1.	化粧品についての基礎知識の説明
2.	スキンケアの必要性、正しい洗顔やスキンケアについての説明
3.	洗顔、パックの体験
4.	ティタイム(ふり返り、意見交換)
第3回 身体的成熟についての知識とそれに合った下着の選び方	
1.	思春期の体の変化についての説明
2.	下着の必要性について説明
3.	下着の選び方について説明(実際に下着に触れたり、自分に合ったタイプをフローチャートで探ったりする)
4.	ティタイム(ふり返り、意見交換)
第4回 買物場面での社会的ふるまいと女性らしいファッション	
1.	店内や買い物場面でのふるまいについて事前学習
2.	買い物(自分に似合う服を探し、試着や鏡をあわせてから買う)
3.	外食(ランチ)
4.	スキンケア用品、下着売り場を回る(第2、3回を受けて)
第5回 聴き方・話し方	
1.	上手な聴き方や話し方のポイントについて説明
2.	聴き役、話し役に分かれてロールプレイ(話し役はテーマに沿った話をする、質問されたら答える。聴き役は、相手に体を向ける、相づちをうつ、話を最後まで聞いてから質問する)
3.	ティタイム(ふり返り、意見交換)
第6回 余暇活動Ⅰ(お菓子作り)	
1.	クッキーの作り方の説明
2.	ペアごとで作業をすすめる、出来上がったら片づけ
3.	作ったクッキーでティタイム(ふり返り、意見交換)
第7回 余暇活動Ⅱ(遊園地)	
1.	グループで園内を自由に回る
2.	お弁当
3.	グループで園内を自由に回る
第8回 月経について	
1.	月経が起こるメカニズムについて説明
2.	月経時の対処法(実際に生理用品を使いながら解説)
3.	ティタイム(ふり返り、意見交換)

## 【結果と考察】

### 1. 扱った社会的スキル・知識の妥当性

回収できた回答は、小学4年から大学4年の保護者12名分であった。回答の結果について、その平均値と標準偏差を表4に示す。この表に示したとおり、すべて平均値4.0以上の値を示しており、保護者達が今回扱ったスキル・知識の必要性は高いと回答したことがわかる。つまり、今回扱ったスキル・知識の妥当性は高いといえる。

なかでも高い平均値を示したのは、「月経の対処(第8回)」「体の発達についての知識(第3回)」といった思春期の女子の身体的発達についての知識や対処スキルであった。これらのスキル・知識に関しては、学校場面でも指導が行われるものであるが、HFPDDの女子達は学校での指導のみでは習得しにくいことが予想される。加えて、家庭でも話題として取り上げにくい性質のものでもある。したがって、HFPDD女子たちへのプログラムのテーマとしてとりあげ、彼女たちの理解や発達水準に合わせてセッションを組むことは必須といえる。

一方、比較的值が低かったものは、「余暇の過ごし方(第6回、7回)」であった。先述の「月経の対処(第8回)」「体の発達についての知識(第3回)」とこれらの平均値の差には有意な差が認められた(月経の対処×余暇(6回):  $t(22) = -2.93, p < .01$ , 月経の対処×余暇(7回):  $t(22) = -4.01, p < .01$ , 体の発達×余暇(6回):  $t(22) = 2.59, p < .05$ , 体の発達×余暇(7回):  $t(22) = 3.46, p < .01$ )。ここから、思春期の身体的発達についての知識や対処スキルと比して、余暇の過ごし方は必要性が低いようである。余暇をどう過ごすかということも、もちろん重要ではあるが、思春期に起こる女子特有の変化についての知識や対処スキルの獲得は保護者にとって深刻な問題といえるのかもしれない。実際、これらが身につけていないことは、仲間関係の形成を阻害する要因や性被害に遭いやすくなる要因と成りえよう。

さらに、今回のスキル・知識以外でも身につけて欲しいものがあるかどうか回答を求めた結果、12名中2名が「幾つかある」、8名が「多少ある」、2名が無回答であった。ここから、今回のプログラムが保護者のニーズを全て満たしていたわけではないことがわかる。表5には、身につけて欲しいスキル・知識について自由記述で回答を求めた結果を示す。この表にも示したとおり、保護者からの回答は、今回のプログラムでとりあげたスキル・知識のカテゴリーには対応していることがわかる。したがっ

て、今回とりあげたスキル・知識に関しては保護者のニーズを全て反映してはいなかったものの、カテゴリーとしては適切であったといえる。今後、このカテゴリーを前提として、セッションで扱うスキル・知識をさらに洗練させる必要があるといえる。

表4 活動ごとのスキル・知識の妥当性の評価

回	スキル・知識	平均	SD
第1回	店内での適切なふるまい方	4.67	0.49
	食べる時のマナー	4.58	0.67
第2回	スキンケアの知識	4.42	0.51
	スキンケアの仕方	4.25	0.62
第3回	体の発達についての知識	4.83	0.39
	下着についての知識	4.75	0.45
第4回	店内での適切なふるまい方	4.58	0.67
	服の選び方	4.25	0.62
	余暇の過ごし方	4.42	0.51
第5回	聴き方のスキル	4.75	0.62
	話し方のスキル	4.67	0.65
第6回	余暇の過ごし方	4.00	1.04
	女子同士の集団行動	4.42	0.67
第7回	余暇の過ごし方	4.00	0.74
	女子同士の集団行動	4.25	0.62
第8回	月経の仕組みの知識	4.58	0.67
	月経の対処の仕方	4.92	0.29

表5 その他に身につけて欲しいスキル・知識

身につけて欲しいスキル・知識	カテゴリー
ふるまい(座り方、お辞儀の仕方)	ふるまいとマナー
おしゃれ(髪型やファッション)	身だしなみ
女の子らしい言葉遣い	コミュニケーション
友だちとのかかわり方	スキル
性の知識	思春期の体の発達
料理、裁縫	余暇活動
余暇の過ごし方のバリエーション	

### 2. 各セッションの内容、およびセッション後の変化

以下より、セッションごとに内容、および変化について結果と考察を記述する。参加者の参加態度についての評価、および当日のプログラム内容の評価についての結果を表6、表7に示す。なお、表2で示したとおり、各セッションの参加数には幅があり、参加が3名のみであったセッションもある。そこで、今回の評価結果に関しては、中央値(Median)と範囲(Range)の算出をおこなった。

セッション後の変化については、プログラム後に変化があったかについての評価の結果を、

表8に示した。「変化があった」「多少あった」「なかった」がそれぞれ何名回答したかまとめてある。

表6 各セッションでの子どもの参加態度の評価

	①楽しく参加していたか	②積極的に参加していたか	③興味関心を持っていたか	④内容を理解していたか
第1回	5 (5-4)	4.5 (5-4)	4.5 (5-4)	4 (5-3)
第2回	4 (5-4)	4 (5-3)	4 (5-2)	5 (5-4)
第3回	4 (4-3)	4 (5-3)	5 (5-4)	4 (5-3)
第4回	5 (5-4)	5 (5-4)	5 (5-4)	4 (5-2)
第5回	5 (5-4)	5 (5-4)	5 (5-4)	5 (5-4)
第6回	4 (4-4)	5 (5-4)	5 (5-4)	5 (5-4)
第7回	5 (5-4)	5 (5-4)	5 (5-4)	4 (4-3)
第8回	4 (4-3)	4 (5-4)	4 (5-2)	3.5 (5-2)

※ () 内は範囲(Range)

表7 各セッションの内容の評価

	スタッフ回答		保護者回答	
	⑤女子に必要か	⑥スケジュール、進捗は適切か	⑤女子に必要か	⑥スケジュール、進捗は適切か
第1回	5 (5-5)	5 (5-5)	4 (5-4)	5 (5-4)
第2回	5 (5-4)	3 (5-2)	5 (5-5)	5 (5-5)
第3回	5 (5-5)	5 (5-4)	5 (5-5)	5 (5-4)
第4回	5 (5-4)	5 (5-4)	4.5 (5-4)	5 (5-4)
第5回	5 (5-5)	5 (5-4)	5 (5-5)	5 (5-5)
第6回	5 (5-5)	5 (5-5)	5 (5-5)	5 (5-5)
第7回	4 (5-4)	4 (5-3)	4 (4-3)	4 (4-4)
第8回	5 (5-5)	4 (4-3)	5 (5-5)	5 (5-5)

※ () 内は範囲(Range)

#### － 1) 第1回「外食場面での社会的ふるまいとマナー」

まず、子どもの参加態度についてである(表6)が、中央値はすべて4以上となっており、参加者が楽しく積極的に、興味関心をもって内容を理解して参加していた様子がうかがえる。当日の内容についても、スタッフ、保護者ともに高い評価をしており(表7)、女子に必要な

内容であり、スケジュールや進行は適切であったといえる。

セッション後の変化については、表8のとおりであるが、「変化はなかった」とする回答が主であった。「多少あった」との回答の具体的な変化としては、「マナーを少し気にするようになった」という内容であった。

以上のように、この回は子どもの参加態度は良好で内容や進行も適切であった反面、活動後に変化があったのは1名のみであった。この点について、当日の具体的な内容やスタッフレポートを参考に考察を進めることとする。この回は、表3でも示したとおり、事前学習をしてから外食をするというものであった。その事前学習では、お店でのふるまいや食べる時のマナーについて話し合いをして、何に気をつけるか項目を決定した。具体的には、「お店では静かにする、皆でおしゃべりしながら待つ」「食べるときは、良い姿勢で食べる、音を立てない、口に物があるときはしゃべらない」といった項目があがった。これらの項目について、セッション当日に評価をおこなったところ、本人評価でもスタッフの評価でもほぼ達成されていた。達成されるために、実際の食事場面では項目に注意が向くように働きかけをおこなったわけであるが、軽く声をかけるのみの働きかけで充分であった。つまり、このセッションで扱った店内でのふるまいや食べ方のマナーについては、プログラム時にすでにある程度習得していたとも考えられる。また、「マナーを気にするようになった」との保護者からのコメントは、こうした働きかけがあったためであるといえる。今後、この内容のプログラムを作成するに際しては、参加者のレベルに応じた項目を選定することが課題といえよう。

#### － 2) 第2回「スキンケア」

まず、子どもの参加態度についてである(表6)が、中央値はすべて4以上となっているものの、「③興味・関心を持って参加していたか」に関しては範囲が広がっている。スタッフによる自由記述をみていくと、「めんどくさいと言っていた」「年齢的に早いせいか、興味関心を持っていた様子はなかった」などコメントがあった。スキンケアの必要性について発達段階に応じた内容で組む必要があったといえる。

当日の内容については、「⑥スキル・知識獲得に際し、スケジュールや進行は適切であったか」についてスタッフの回答の中央値が低かった。自由記述をみていくと、「時間が余ったとき、何をすればいいかわからなかったようだ」

表8 プログラム後の変化

回	スキル・知識	あつた	多少	なかつた	計(人)
第1回	店内での適切なふるまい方 食べるときのマナー	0	0	3	3
		0	1	2	
第2回	スキンケアの知識 スキンケアの仕方	2	1	1	4
		1	2	1	
第3回	体の発達についての知識 下着についての知識	1	2	0	3
		1	2	0	
第4回	店内での適切なふるまい方 服の選び方 余暇の過ごし方	0	2	4	6
		0	2	4	
		0	1	5	
第5回	聴き方のスキル 話し方のスキル	0	0	1	1
		0	1	0	
第6回	余暇の過ごし方 女子同士の集団行動	1	3	2	6
		1	1	4	
第7回	余暇の過ごし方 女子同士の集団行動	0	1	2	3
		0	1	2	
第8回	月経の仕組みの知識 月経の対処の仕方	0	2	2	4
		1	0	3	

といった回答がみられた。スキンケアを体験する際に待ち時間が長くなり、参加者によっては時間を持て余したようである。同じ観点(⑥)に関して、保護者からの評価は高かったが、これは専門家に正しい方法を教えてもらったこと、洗顔の体験ができたということで高い評価が得られたようである。スタッフや子ども自身からも、体験ができたことには高い評価が寄せられていたため、セッションの内容よりもスケジュール調整が今後の課題と言えよう。

セッション後の変化については表8に示したとおり、変化があったとの回答が主であった。具体的な変化としては、「スキンケアの知識」については、「スキンケア・化粧品への興味が強くなった」といった回答があった。「スキンケアの仕方」については、「多少は丁寧に洗うようになった」「洗顔料を使うようになった」といった回答であった。より詳細に効果について検討するに当たり、活動後1週間後と1ヵ月後での評価を見ていくこととする。この回答が回収できたのは、5名分であった。まず、1週間後については、5名中4名が「洗顔料を使うようになった」「洗顔料をあわ立てて使うようになった」と回答していた。しかし、1ヵ月後も継続していたのは1名のみで、あとは「元の洗顔方法に戻ってしまった」とのことであった。変化として短期的なものは認められたが、長期的な変化までは及ばなかったようである。スキンケアについては長期的な変化、つまり習慣化することが課題のひとつといえる。

以上、このプログラムに関しては、専門家か

ら教えてもらったことやスキンケア体験ができたことは評価を受けた側面であった。また、スキンケアへの興味を喚起、あるいは正しい洗顔をするきっかけにもなったようである。一方、課題としては、内容を発達段階に応じたものにする必要があること、それに応じてスケジュールを調整すること、スキンケアが習慣化することを目指した内容を検討することといえる。

### － 3) 第3回「身体的成熟についての知識とそれにあった下着の選び方」

まず、子どもの参加態度についてである(表6)が、中央値はすべて4以上となっており、参加者が楽しく積極的に、興味関心をもって内容を理解して参加していた様子がうかがえる。当日の内容についても、スタッフ、保護者ともに高い評価をしており(表7)、女子に必要な内容であり、スケジュールや進行は適切であったといえる。

変化については表8に示したとおり、全員が何らかの変化があったと回答している。具体的な変化としては、体の発達、あるいは下着について「興味を示すようになった」という回答が主であった。より詳細に効果について検討するに当たり、活動後1週間後と1ヵ月後での評価の結果を記していく。回収できたのは、5名分の回答であった。1週間後、何らかの変化があったと回答があったのは、5名中4名であった。具体的な変化としては、「自分の胸のことを話題にしてきた」「サイズを測った」というように、体や下着への関心が高まった様子がうかがえる。1ヵ月後に関しては、引き続き関心があると回答があったのは3名で「下着のカタログを見たり、下着売り場に行ったりしている」「体や下着について話題にのぼるようになった」との記述があった。専門家から体の発達や下着について適切な説明を受けたことによって、自分の体や下着について関心が喚起され、それを保護者と共有している様子がうかがえる。

以上のように、このセッションへの評価は全般的に高く、興味を喚起するという意味では有効性も高かった。これは、「説明がわかりやすくよかった」「集中が途切れそうな時にクイズをしてくれてよかった」などというスタッフによる自由記述にあるように、参加者のレベルに合わせ、興味を喚起する進行がされたことによる要因が大きいと思われる。このセッションに関しては下着メーカーに講師を依頼したが、体の発達など専門的な内容に関しては講師を招くことの必要性の高さがうかがえる。

#### ー 4) 第 4 回「買い物場面での社会的ふるまいと女性らしいファッション」

まず、子どもの参加態度についてである(表 6)が、「④内容を理解して参加していたか」で範囲が広がっている。自由記述の内容をみていくと「買うと決めたら、すぐ買っていた」というように、コーディネートや自分に合うかということを考えることができなかつた様子が見える。

当日の内容については、スタッフ、保護者ともに高い評価をしており(表 7)、女子に必要な内容であり、スケジュールや進行は適切であったといえる。

変化については表 8 に示すとおりであるが、「変化がなかった」という回答が主であった。「変化があった」との回答の具体的な変化としては、「自分から買い物に行きたがるようになった、好きなものを選びたがるようになった」というものであった。

以上のように、この回は子どもの参加態度は良好で内容や進行も適切であった反面、プログラム後の変化へつながるものではなかった。この点について、当日の具体的な内容やスタッフレポートを参考に考察を進めることとする。この回は、表 3 でも示したとおり、事前学習をしてから買い物をするというスケジュールでおこなった。買い物は、参加者とスタッフで自由にショッピングセンターを回るといったことをとった。スタッフのレポートからは、「他の子を誘って楽しそうに買い物をしていた」「これどう?とよく聞いてきた」などと楽しく買い物ができ、自分に似合うか見ることができていたといえる。しかし、自由に回るといったことをとった分、「店内でのふるまい」「服の選び方」を意識することは難しく、日常的な買い物と同じやり方で活動に参加していたと考えられる。したがって、保護者からすると、「変化はなかった」という回答になるのであろう。

以上、この回では、参加者が楽しく余暇を過ごすという意味では評価は高かったといえるが、スキル獲得という意味ではセッション後の変化は弱かった。今後こうしたセッションを持つ場合は、余暇とスキル獲得のどちらに重点を置くか明確にした上で、内容を調整する必要があるといえる。

#### ー 5) 第 5 回「聴き方・話し方」

まず、子どもの参加態度についてである(表 6)が、中央値はすべて 4 以上となっており、参加者が楽しく積極的に、興味関心をもって内容を理解して参加していた様子が見える。

当日の内容についても、スタッフ、保護者ともに高い評価をしており(表 7)、女子に必要な内容であり、スケジュールや進行は適切であったといえる。

変化に関しては、回収できたのは 1 名分の回答であった。「話し方」については「多少変化があった」と回答があり、「以前より人の話を最後まで聞くようになった」という変化が報告された。より詳細にその変化について検討するに当たり、活動後 1 週間後と 1 ヶ月後での評価を記すことにする。回答が回収できたのは 2 名であったが、1 週間後と 1 ヶ月後ともに、1 名は「全てすでにできていた」、1 名は「変化があったかわからない」という回答であった。

以上のように、この回は子どもの参加態度は良好で内容や進行も適切であった反面、その変化は明確ではなかった。この点について、当日の具体的な内容やスタッフレポートを参考に考察を進めることとする。この回は、「聴き方」「話し方」について幾つかポイントを説明したあと、ロールプレイをおこなった(表 3 参照)。この回は、参加者が少ないこともあってスタッフとペアになり、ロールプレイをおこなった。スタッフによる記述をみると、いずれの参加者もこの回に扱ったポイントについては達成していたと報告があった。つまり、スタッフとのペアであり、かつロールプレイという設定場面では、この回に扱ったスキルは達成できていたようである。したがって、参加者同士がペアになった場合や日常場面での達成度に関しては、今後の検討が必要であろう。

#### ー 6) 第 6 回「余暇活動 I (お菓子作り)」

まず、子どもの参加態度についてである(表 6)が、中央値はすべて 4 以上となっており、参加者が楽しく積極的に、興味関心をもって内容を理解して参加していた様子が見える。当日の内容についても、スタッフ、保護者ともに高い評価をしており(表 7)、女子に必要な内容であり、スケジュールや進行は適切であったといえる。

変化については表 8 に示すとおりである。具体的な変化の内容としては、「家でも作ってみた」「興味を示し、自分で作りたいと言ようになった」などという回答があった。プログラムで体験したことをきっかけにして、女子らしい趣味への関心が生じたといえる。

#### ー 7) 第 7 回「余暇活動 II (遊園地)」

まず、子どもの参加態度についてである(表 6)が、中央値はすべて 4 以上となっており、

参加者が楽しく積極的に、興味関心をもって参加していた様子がうかがえる。「④内容を理解して参加していたか」に関しては、範囲が低くなっているが、この回の内容は「余暇活動」に重点を置いたセッションであったため、理解すべき内容が他のセッションよりも不明確であったといえる。一方、当日の内容については、中央値や範囲が他と比して低い値をとっている。まず、「⑤内容は女子に必要なものであったか」に関して、保護者の値が低かった。女子らしい内容というよりは、皆で楽しく過ごすということのみで活動を行ったため、女子に必要な内容とはいいいにくいのであろう。さらに、「⑥スキル・知識獲得に際し、スケジュールや進行は適切であったか」についてはスタッフと保護者から、「すべて自由にするよりも、回る順番を決める、購入するチケットを決める方がよかった」などと回答があった。楽しく過ごすためのより一層の工夫が必要といえる。

変化については、表8に示すとおりである。具体的な変化の内容としては、「遊園地で遊ぶことに興味を持ち、会話が広がった」との回答があった。余暇支援としての目的は、ある程度達成されたといえる。

#### ー8) 第8回「月経について」

まず、子どもの参加態度についてである(表6)が「③興味・関心を持って参加していたか」「④内容を理解して参加していたか」で範囲が広がっている。自由記述の内容をみていくと「まだ経験していないので、ピンときていなかった」など、実際に経験していない参加者に興味関心や内容の理解を求めることが困難であったようである。

セッション内容の評価については、中央値や範囲が他のセッションと比して低い値をとっている。この点について、スタッフや保護者からの自由記述の内容も含めて考察を進める。「⑥スキル・知識獲得に際し、スケジュールや進行は適切であったか」について、スタッフの評価が低めであった。自由記述では「月経の仕組みについての説明が難しかった」とあり、月経の仕組みという抽象的な内容を参加者にわかりやすく伝えるという課題が残った。一方、保護者からの評価は高く「生理用品を使って、具体的に教えてもらえた」という回答が主であった。

変化については、表8に示すとおりである。「変化があった」場合の具体的な内容としては、「いつ頃くるのかと話した」「対処の仕方に気を使うようになった」などというものであった。

より詳細にその変化の内容について検討するに当たり、活動後1週間後の評価の結果をみていくと、何らかの変化があったという回答があったのは4名であった。「月経や女子の体のことについて話をする機会を持てた」との回答が主であった。

以上このセッションでは、体の変化や月経について興味を喚起した、保護者と話題を共有できたという点で変化が認められた。今後は、月経を経験していない参加者も含め、理解度を高める工夫が必要といえる。

#### 【女子への社会性発達支援プログラムの展望と今後の課題】

以上、今回作成したプログラムについて、扱ったスキル・知識の妥当性、およびセッションの内容の評価、およびセッション後の変化について記述してきた。ここで、これまで内容をまとめ、プログラムの展望と今後の課題について記すこととする。

まず、スキル・知識の妥当性に関してであるが、今回とりあげたスキル・知識のカテゴリーは保護者からのニーズをほぼ反映しており、その妥当性が高かったといえる。ただし、実際に扱ったスキル・知識に関してはさらに洗練させる必要性がうかがえた。

今回扱ったスキル・知識のうち、「月経の対処(第8回)」「思春期の体の発達についての知識(第3回)」といった「思春期の体の発達」についての知識に関しては、保護者からの評価が特に高く、プログラムには必須の内容といえよう。さらに、その他に身につけて欲しいスキル・知識(表5)に「性の知識」が上げられていたが、彼女たちを性被害から守るという意味でも「性の知識」は検討する必要がある項目といえる。

一方「余暇の過ごし方」、特に第7回の活動についてはその必要性が低いという評価であった(表4、表7)。思春期以降は仲間関係を形成することが重要な課題となってくること(辻井・藤吉,2004)、女子同士の仲間関係形成の場の必要性(神谷他,2007)を踏まえ、こうしたセッションを加えたのだが、むしろ第4回での「買い物」や第6回での「お菓子づくり」といった女子らしい余暇の過ごし方に、仲間作りの要素を加えることが、参加者が楽しく活動に参加しながら、女子らしい趣味への関心を引き出せるといえよう。

次に、セッションの内容とセッション後の変化についてであるが、各セッションについての評価や変化、今後の課題はすでに記したので、



ここではそれらを統括して、プログラムの今後の展望や課題を述べたい。

本プログラムの特徴は、女子に必要なスキル・知識を幅広く扱い、セッションごとに内容を構成したこと、より適切なスキル・知識の獲得を目指して内容によっては専門家を講師としたことである。こうした特徴を受けて、参加者のうちの何人かは、扱ったスキル・知識に関しての興味が喚起されたり、セッションで扱った内容について保護者と話題を共有するようになっていく。したがって、本プログラムは女子として必要なスキル・知識の獲得のための契機的な機能を担っていると考えられ、そうした意味での有効性は高いといえる。特に、興味の喚起が顕著にあらわれていたのは、第2回、第3回、第6回、第8回といった、体験的な要素が組み込まれたセッション、あるいは専門家が進行を担ったセッションであったといえる。ここから、より適切な知識を体験的に学べるようなプログラムの有効性の高さが示唆される。本プログラムでは今後もこうした要素を組み入れ、さらに有効性を高めていくこととしたい。

さらに、本プログラムでは仲間作りの場としての機能も持たせるため余暇活動も組み込み、女子同士で外出したり、共同作業をする機会も設けた。結果、いずれのセッションでも参加者たちは楽しく積極的に参加できていた。神谷他(2007)で述べたとおり、女子のプログラムには、女子同士で学べる場、仲間関係を形成する場という要素は重要な側面であるが、この側面については今回のプログラムでも十分に機能しているといえる。

課題としては、参加者の発達水準・理解に合わせたセッションにしていくこと、プログラムによる変化をより向上させ、スキル・知識の定着化を図ることであろう。これに関しては、本プログラムのもう一つの特徴である参加者が流動的であることが関係しているといえる。流動的であることによって、各セッションでの目的、進め方を参加者の水準に合わせる事が困難になっているといわざるを得ない。定着化に関しても、同じカテゴリーのスキル・知識を扱うセッションへの安定した参加が期待できない分、スキル・知識の定着化も困難になる。今後は、同じカテゴリーのスキル・知識をあつか

うセッションを数回続けておこない、一連のセッションへの参加を呼びかけるといった形態をとることも検討したい。

## 【まとめ】

HFPDDの女子達がより適応的な生活を送ることを支援するため、女子としての社会スキル・知識の獲得を目指したプログラムの作成を試み、実施した。とりあげたスキル・知識のカテゴリーは「ふるまいやマナー」、「身だしなみ」、「コミュニケーションスキル」「思春期の体の発達」であった。これは保護者のニーズをほぼ反映しており、このカテゴリーの妥当性は高かった。

実際のプログラムにおいては、女子として必要なスキル・知識の獲得のための契機的な機能、女子同士で学べる場、仲間関係を形成する場としての機能を担っていると考えられた。今後の課題としては、とりあげるスキル・知識をさらに洗練させること、参加者の発達水準・理解に合わせたセッションにしていくこと、スキル・知識の定着化を図ることがあげられる。

## 謝辞

プログラム作成にご協力いただきました、アスペ・エルデの会の「女の子グループ」の皆さま、講師を務めてくださった方々、アスペ・エルデの会のスタッフの皆様に感謝いたします。また、ご支援いただきました明治安田こころの健康財団の皆様に深謝致します。

## 文献

- 神尾陽子(2005)：自閉症にみられる性差，教育と医学，第53巻5号，85-93
- 神谷美里・辻井正次・石川道子(2007)：高機能広汎性発達障害女子のグループ活動の試み，小児の精神と神経，第47巻第2号，115-122
- 本田秀夫・清水康夫・日戸由刈・今井美保(2000)：高機能広汎性発達障害の女子例にみられる発達精神医学的問題，研究助成論文集，第36号，29-38
- 辻井正次・藤吉倫子(2004)：発達障害児のピア・サポート 同じ「想い」を分かち合うことの意義，教育と医学，第52巻12号，48-55